

知事講演録

平成 25 年度鳥取大学公開授業講座「とっとり学～とっとり再発見～」

11 月 18 日(月)午前 10 時 30 分～12 時@鳥取大学共通教育棟 A20 講義室

(司会) おはようございます。今日はこれから始まりますが、学生さんには何回か言っていますけども、たくさんのかたがいろいろ来られていますので、寝ないように、あと携帯とか、ラインとかしないようにしっかり目を開けていてください。ではご紹介いたします。今日は「未来を拓くとっとりチャレンジ」という題で鳥取県知事の平井伸治さんにお話ししていただきます。ではよろしく願いいたします。

(平井知事) 皆さまおはようございます。朝まだ早いわけでございますので、寝ないようにという注意が入ると、最近の大学も変わったなと思いましたが、ともかくですね、皆さんとちょっと 1 時間ほどですけども、これからの鳥取の未来について考えてみたいなというふうに思います。今日は 1 年生のかたが多いということを伺っていますが、公開講座ということもありまして、多種多様な方々にもお越しをいただいているようであります。私の考える一端も申し上げさせていただきますけれども、やはり若い方々、若い方々の力が地域にとっても必要なんですね、そういう意味で、ぜひ皆さまにもこの一連の鳥取学の講義を通じて、いろんなことを考えていただきまして、皆さまの思いを地域づくりにぶつけていただければと思います。

昨日も鳥取大学のOBの方々と一緒に仕事をしておりました。学生人材バンクというグループですけども、元々はこの中で勉強をしておられた方々なんですけども、地域づくりに関わろうということございまして、様々なイベントを手掛けたり、あるいは農業のお手伝いをしたり、そうした事業に乗り出しまして、今では一人立ちしてNPOとしてされておられるようになりました。

こんなようなことから地域けっこう変ってくるんですね、昨日、私はある竣工式に行っていました。それは八頭町の志子部という集落です。この志子部というのは高齢化がものすごく進んでいまして、若い人は 1 人も住んでいない、そういう所だったんです。そこに平賀さんという平賀謙太さんというかたと渡辺萌生さんというお二人が入りまして、住み始めたわけであります。シェアハウスですね、別にその男女でされるのではなくて、女性同士でこれからまたシェアハウスをされるそうなんですけども、そういうシェアハウスをしながら地域の中で暮らして役に立てることをやって行こうと、例えば狩猟の免許を取りまして鳥獣対策をやろうと、有害鳥獣対策をやろうとか、それから特産品、若い女性の目線でこういう特産品がいいじゃないかとか、農家食堂みたいにして、その農家をやってみようということをやったり、実際にネギを作ったり、サツマイモを作ったり、また、地域の人達と一緒に昨日は鍋を作ったりされていました。こういうようなことに乗り出す人というのは必要なんですね、今、日本がどんどんと変わり始めていて、鳥取県というのはいわば一番人口は少ないですから、一番本当は変わらなければいけないんです。その変わらなければいけない地域の、本当の未来を引張ってくれる人たちというのは、やっぱり若い層でありまして、皆さまがやれる仕事って一杯あるんですね。

実はこの平賀さんと渡辺さんがその地域に住み始めたのは去年の4月のことです。平成24年の4月でした。そしたら最初の内は、この若い人達、何しに来たかなあというようなものです。しかし、だんだんとその地域の人達が理解をしてくれて、そのお仕事を皆で盛り上げようということを始めました。風のうちという宿舎兼作業所のような所で、言わばその食堂、レストランですね、開くとかそういうようなことも始められていたわけでありまして。ところがあろうことか、今年の1月に家が燃えてしまいました。風のうちが焼失をしたんです。普通ならそんな火事まで出して若い者が何をしとるだあとと言って、追い出されても仕方なかったかも知れませんが、実は逆だったんです。「あんたらがしゃんとせないけんで」そう言っておばあちゃんが声をかけてくれる。じゃあ、皆で助け合って行こう、何とか再興をしようと、私の方にもその話が来まして。ぜひ、支援しようと。それで過疎対策の事業を使いまして、昨日再建を果たしたんです。1,800万程の事業費で家を1棟建直しまして、そのオープンを昨日したところなんですね。大勢の志子部の集落の皆さんが集まっていたし、それだけではなくてもっと下の方、隼という駅がありますけども、あのあたりの人達だとか、旧船岡町なんですけども、その船岡の地域おこしをやるとういう協議会のグループの方々とか、いろんな方々が集まられて非常に賑やかな竣工式となりました。たった二人の若者から始めて、そうして周りを巻き込んで地域が変わっていくんです。お年寄りも「じゃあ、わしらもせにゃあいけんなあ」と言って頑張り始める。そんなようなことだと思います。そういうチャレンジをしないと鳥取というのはなかなか立ち行かないかも知れません。シリーズの講義でいろんな話を聞かれたと思います。魅力があるんですよ、様々に。ただ、それが本当に生かされているだろうかということがあります。

今人口で言えば58万人を切っちゃったんですね、全国で一番小っちゃな県であります。じゃあどうだろうかということですよ、あろうことか昨日ガイナレが負けまして、とんでもないなあと思うんですけども、こっちが応援しても応援しても勝ってくれないという。これが実は鳥取県らしいんですよ、以外に県民の中にはこうやってぎりぎりのところで頑張っていることに、共感を抱く人が多いんです。JFLからJ2に上がろうとして2回失敗しました。それも最後の試合で逃してしまう、3度目の正直でJ2に上がったんですけども、そうしたら今度は今3年目で今度は最下位になってしまったってことです。カマタマーレ讃岐という、ほとんどどうんをもじったようなチームがありますけれども、そのカマタマーレ讃岐と大事な決戦を12月にやるかも知れない。19日にですね、JFLからJに上がるには資格審査がいるんですよ、それはファイナンスだとか、観客席がちゃんと出来てますかとか、チームの体制だとか、応援の体制だとか、そういうものを審査されるんですけども、それが19日にありまして、その19日の審査がカマタマーレ讃岐が通りますとそのカマタマーレ讃岐とうちのガイナレ鳥取との世紀の一戦があるわけでありまして。片方でガンバがどうした、神戸はどうした、京都がどうしたとやっているときに、こちらはJ2に残れるかどうかの最終決戦に挑むということでありまして、こんなことがぎりぎりの戦いなんですよ、我々はそのぎりぎりの戦いをやって来ているわけですよ。そのぎりぎりの戦いで、じゃあ勝機はないかというところがあるんですよ。たった1つある。それは人の力ですよ、これでは他所に負けないものがある、今日もそうですけども、こうやって私もここから顔を拝見していますけど、若い方々の姿もございますし、いろいろこういう地域活動で熱心にやっておられ

るかたの姿があったり、大学の先生方があったり、豊島^{てしま}学長さんもおられるというようなこと
でございまして、たいへんなもんでございます。

こういうような小っちゃなコミュニティというのは禍いするようで、実はいいこともあるんで
すよね、例えば産学官連携をやろう、あるいは若い人とそれからお年寄りが一緒に行動を起こそ
う。これは都会ではなかなかできないことがここじゃあできる。その辺に勝機を見出すしかない
じゃあないかなあと思います。だから、ガイナレ鳥取も強小という強くて小っちゃいというこ
とを掲げるわけです。小さければ弱いとは限らない、小さいからこそ強いということはあるわけ
ですね、特に小回りをきかせる。私達は本当に言わなければいけないということを皆で話し合っ
てやってしまう、そういうことができれば、これが我々にも十分なチャンスがあるだろうとい
うことでございます。

そういうようなことでいろんなそのチャレンジがある。例えば自然、グリーンウェイブという
ことを今年はやりました。先週それが終了しまして、全国都市緑化フェアが終わったわけであり
ます。ただ、緑と花が終わるかという終わらないですね、むしろ今回のものを通じて私達はP
R、アピールを全国や世界に向けてやるチャンスをもたらした。エコツーリズムも国際大会とか、
全国植樹祭だとか、多くの共感を広げることができたのも事実です。あるいはソフト関係、漫画
王国ということをやりました。そういうようなことをいろいろとやるわけですよ。それから
産業でもそうです。三洋がパナソニックに事実上吸収されるようなかたちになりまして、非常
に疲弊しているというふうに言われますけども、じゃあ、その技術者が残っていますから、それ
で新しい産業を創造しようとか。

改めて地図を見てみますと日本地図では鳥取県はアジアに近い、だから、東京よりもずっとア
ジアに近いんですよ、飛行機に乗ってみると良く分かります。羽田に行くのに1時間15分、同
じような時間で仁川空港に着くわけですよ。ですから、どっちが近いとも言えないわけですよ。
だから、これは裏を返して言えば、東京から韓国に行くには倍かかるということですよ。これ
は飛行機だとそれが1時間の違いかも知れませんが、船だとえらい違いになります。ロシアの
極東に行こうとか、韓国の対岸に行こうとか、上海に行こうとか、そういうことを考えますと輸
送を、船で行きますとこれは圧倒的な違い、日にちベースでの違いになってくる。その辺は我々
にとって有利なんですよ。

考えてみますと昔は遺跡がありました。青谷上寺地遺跡というのは同じ鳥取市内にございませ
ん、この青谷上寺地遺跡からはいろんなものが出てくるわけです。先般も秋篠宮様と秋篠宮妃
がこの湖山にやって来られまして、この都市緑化フェアを楽しまれるというか、参加をしてい
ただいたわけでございます。その秋篠宮妃がつい数年前にもこちらの方に来られまして、鳥取大
学の井上先生という当時医学部長をされていた先生にもご協力をいただきまして、青谷上寺地遺
跡のご紹介をしたんです、妃殿下に。そのときに、それは何故かと言うと結核予防の全国大会があ
りまして、そのときにいろんなものが出ていますけども、その中で結核の関係するものが実は青谷
上寺地遺跡で出ているんです。これは世紀の大発見だったんです。例えば脳みそが出たとかです
ね、そのプヨプヨしたままの脳みそが出たとか、保存状態が良かったんです。ですから骨もいろ
いろ出てきまして、カリエスと言うんですけども、この首がこうかしげたようなそういう骨ま

で出てきている。これ実は結核にかかった人の証拠なんですね、法医学的には非常に大事な物なんです。それは青谷上寺地遺跡に結核患者が葬られていたということになります。実は結核というのは日本列島になかった病気です。大陸から持ち込まれたんです。ですから、もっともつと後の時代に結核というのが日本に入ったと言われていたんですが、その記録を大幅に塗り替えまして、弥生時代、青谷上寺地遺跡が最古の結核患者の痕跡だったわけです。それを、骨をお見せをしましてね、それで妃殿下にもご覧をいただき、井上先生にもご説明していただきまして、こういうような結核の特徴があるということだったんです。最後は鳥取空港、この湖山の鳥取空港からお見送りをするときに、妃殿下と結核予防の今後だとか、鳥取でのご滞在についてお親しくお話しをさせていただいたとき、妃殿下の方から「知事さん、鳥取というのは結核の故郷だったんですね」と言われて、ちょっと違うようなニュアンスなんですけど、そう言われてみればそうかも知れません。そんなことでお帰りをいただいたわけでありまして。

いずれにいたしましても、いろんなチャレンジがある、教育もそう、子育てもそう、あるいは支え愛の地域づくりもそう、そうしたことに皆で向かって行けるチャレンジをこれから切り開いて行きたいと思っております。これが湖山の都市緑化フェアの会場です。この中にもお運びいただいたかたもたくさんいらっしゃるというふうに思いますが、91%のかたが素晴らしいフェアだったというふうに評価をしていただけました。実際ポール・スミザーさんが監修されたお庭ですとか、これはちょっと見えていますがアースガーデンというのがございまして、砂と砂像とですね、それからガーデンが一体となった鳥取でなければできないような、そんなようなことをしました。

こちらの方にはこれは地域の子供達やそれぞれ学校から鉢を綺麗に絵を塗ってくださいます、それぞれの思い思いにガーデニングをやっていただいたということでありました。このフェアで1つ話題を撒きましたのが、ポンちゃんというものでございまして、白いタヌキ、これは南部町で見つかったんですね。この変種なんですけど、脱色してしまったということらしいんです。動物の世界っていうのは、目立ったやつっていうのはやつつけられるという、そういうことがあります。また、実は捕獲をされたときに、ちょっとやせ気味であったと。2歳の雌かなと言っていたんですけど、それでその捕獲をされたかたが農家さん、これは牛の餌を食べに来たんですね。その牛の餌を食べに来た農家の罫にかかりまして、それで動物園だとか、引き取り先はないだろうかと、白いタヌキっていうのは、これは神の使いであるとおっしゃいます、これを大々的にあっちこっちのテレビや新聞で報道をされていまして、どっか引き取り手がないかということがあって、なかなかこう見つかる様子が出てこなかった。そこで、県の方で一時保護をしまして、フェアの会場で展示飼育をしました。また、これ腫れ物に触るようなものでございまして、24時間獣医が付きっきりでございまして。何かあつてはいけません。それで展示飼育をするということで、湖山池公園の方にその出いただく時間も、これも時間を限定しまして、10時～3時まで1時間ごとに休みがあると、大学よりいいですね。非常にいい暮らしをされました。あとは、ずっと宿舎で待機をされるということでございまして、宿舎も動物病院の方でお世話をさせていただいたというのが、実際のところでございます。そちらの方で待機をされることで健康状態を診ながら、もちろん餌だとか、体調管理みたいな、非常に預かっておられるうちにだんだん元気になりまして、それで体調も良くなってきて、むしろ、獣医さんに当時言わせますと、時間制限するよ

うなものじゃないと。むしろ、本当に元気なんで、ずっと会場にいてもいいんじゃないかという話もあったんですけども、我々は、個体、そういう動物の保護をするという責任の方を重視しましたので、そういうルールでやっておりました。人だかりになりました。

それで、ずっとですね、引き取り先を探していったんですね。そしたら、正直申し上げて3つほどの動物園から手が挙がりまして、その中で、池田動物園という岡山の動物園。ここはタヌキを飼ったという実績もありますし、そういう意味で条件もいいだろうと。これからの生涯、これは終生飼養というんですけども、一生そこで飼ってもらおうとしたら、その方がいいんじゃないかと。識者によりますと、結構人に慣れている、最初から結構人に慣れている感じがあったと言ったんですね。放獣、放してしまうという手もあるんですけども、その後、じゃ、暮して行けるかということにはいろいろと難しい問題もあるだろうな。それで、動物園の方が彼女の人生にはいいんじゃないかと、人生じゃないかもしれませんが、タヌキの生涯としては幸せではないかということでありました。これが向こうの方に行きまして、岡山に行きまして、一般公開しましたけども、早速、人気者になっているようでございまして、報道もされているというようなことでございます。

この都市緑化フェアでございまして、ジオパークエリアで初めて開催をした。これジオパークというのなかなかなものですよ。砂丘だとか、浦富海岸だとか、そうしたものがありますけれども、やっぱりその綺麗さっていうのは、海外でも評価されます。先週は、私タイの方に行っていましたけれども、そうしたタイの皆さんから見ても、砂丘っていうのはおもしろいと言っていました。中国の皆さんもそうですし、韓国の皆さんもそうです。以外なんですけど、こういう大きな砂丘、馬の背のような、砂丘と海とが一緒になっている光景っていうのは、あんまりないですよ、世界を探しても。その辺に珍しさがある。

また、緑化スタイルも地域の山陰菊という黄色い菊ですね、これ、会期の後半の方で咲きました。その他にも様々なもの、ラッキョウの花なんかも含めまして、そういうもので鳥取流の緑化スタイルというのを自然なカタチでやる、生きる力を尊重しようということなんです。あんまり農薬だとか、肥料だとか、そういうことをやるんじゃなくて、その花の咲く力を育てるというようなそういう考え方でやりました。どんどんボランティアのかたにも入っていただいて、お世話していただく。延べ5,600人規模でのボランティアの登場ということになりました。また、ナチュラルガーデンをやる専門家も養成しようと、地域の中でそうした方々にも、ご協力いただく方々を作ったわけでありまして、秋篠宮殿下と妃殿下がお出ましになりまして、フェアの中核である緑化祭ということをやりました。湖山池公園に記念の植樹もしていただきました。

実は全国植栽祭でも植樹をしたんですね。天皇皇后両陛下が植樹をされました。我々、役所の人間というのは時々失敗することもあるものでありまして、それに基づいて学習することもあるわけでありまして。今回、非常にスムーズにこの植樹ができました。全国植栽祭のとき、天皇皇后両陛下のときは大変だったんですね。テレビでご覧になったかたもいらっしゃるかもしれませんが、こういうようにバケツ型に植樹祭では盛土をするという伝統があるようでございまして、バケツからスポッと抜いたようなカタチで富士山のような山を作るわけですね。これがどうも朝方、ちょっと気候の関係があったのか、ちょっと壊れたみたいでして、それじゃっていうんで、

職員、真面目な職員が一生懸命壊れないように盛土をしたわけでありまして。そうしたら、この盛土なんですけども、それがカチンカチンになりまして儀式用の鋤でこう叩くわけありますけども、皇后陛下が私すぐ後ろにいたんですが、何度、叩いても壊れない。しょうがないんで、手で壊しにかかる、そんなようなことでえらい目にあいまして、それで皇后陛下にも申し訳ないなと思って、ひとしきり終わったときに、申し訳ありませんでした、ちょっと不具合がございましてというふうに謝ったんですけれども、そしたら、ただ、両陛下非常にお優しいですし、何事もお楽しみになるようございまして、天皇陛下と皇后陛下が中央に出会われたときに、天皇陛下が小声で言っておられるのが、何だか聞こえるような気がしたんですね。固かったね。皇后陛下はそうですね、いかがいたしましたなんて、こんなような上品なやり取りが聞こえました。天皇陛下はすごかったですね。日頃から、実は皇居にいろんなものがあるんですね。あれ、びっくりしましたけども、例えば、水鳥公園にお連れしたんです、米子の。そのとき、カイツブリってご存じですかね。水上に巣を作るんです。これは草を集めましてそれで巣をかけるわけです。その巣をかけるのを見ていただくとして、ちょうどそのつがいがいたもんですから、巣も作ってあって、ちょうどいいということで、そこに水鳥公園のスタッフで双眼鏡で見えるようにして置いていたんです。そしたら、あろうことか、両陛下がお着きになると、ちょっとどっかへ散策に出てしましまして、巣はあるんですけども、つがいがいないと、カイツブリがいないと思ったんですけどね。そうしたら大したものですね、両陛下がまた実際にそのレンズを覗きに来られるころにはちゃんと定位置に戻ってこっちを向いていました。鳥も気を使うんです。その水鳥の世界のカイツブリの話を両陛下に、水鳥公園にお着きになったときに申し上げたんです。そしたら、やっどカイツブリが来ておりますんで、ぜひご覧いただきたいと、後程ご覧いただきたいと言ったら、うちにもいますねって仰る、皇居にいるんです。びっくりしました。これはキンクロハジロっていう鳥がいます。今頃、こう入ってきまして湖山池にいっぱいいます。ちょっと目のあたりがこう、ちょっと抜けたような感じで、黒い、下が白いような、そんな水鳥ですけどね、カモ類です。このキンクロハジロもそのとき5月26日だったんで、普通ならもういなくなっているんですけど、渡り鳥で。なぜかいたんですよ。なぜかいるっていうことが分かったものですから、ちゃんとこちらにも仕込んでいまして、両陛下非常に生き物、詳しいですから、お詳しいので、ご質問があるかもしれない。そしたら400羽程いるということが分かりまして、400羽程いますということが分かりました、それで両陛下にあちらの方をご覧いただきますと、なぜか今年は、まだキンクロハジロが水鳥公園でおります。両陛下がお越しになるのを待っていたんでしょうかねということをお申し上げて、しばらくしましたら、皇后陛下の方から、どうしてキンクロハジロがまだいるんですかっていうふうにお訊ねがありまして、この答えまでは、私仕込んでいなかったんですね。困ったんですけれども、とっさの判断で、あ、いや、たぶんロシアから無線が入りまして、まだ返ってくるなと言っていたそうですっていったら、両陛下にっこりと大きな笑顔で、お互いに顔を見合されまして、それ以後、何の質問もなくなりました。

そんなようなことだったんですけども、そういうすばらしい自然が実は、鳥取にあるわけです。これは誇るべきことで、これをこれから我々十分活用していかなきゃいけない。その意味では、グリーンウェイブというのは我々の力や、今回豊かな海づくり大会や、全国植樹祭が今年ごさい

まして、都市緑化とっとりフェア、エコツーリズム国際大会こういうことをやりました。県民の皆さまとそのボランティア活動も大いに盛り上げてまして、これを果たしていこうということになるわけでありませう。

さらに、支え合うこと、特に障がい者の観点というのは、ともに生きるために、障がいを知りともに生きる。それを目指そうじゃないか、そういう運動を鳥取県から起こしたんですね。そしてこれが今どんどんと広がりを見せ始めました。どういうことかと言うと、障がい者とともに生きるということは、頭では分かっていますよね。それは当たり前だと皆さんおっしゃるかもしれませんが、それぞれの障がいの特性があるわけです。例えば、心の病の方々がいる。通してそういう方々にどういうふうに接したらいいのか、どういうふうに声をかけたらいいのか、あるいは放つといった方がいいのか、そういうことがあります。また、例えば、目の見えないご不自由のかたがいらっしゃる、そのかたが交差点で止まっていたとします。助けたいな、助けるべきだ。じゃ、どうやってその交差点を渡るお手伝いをしようかというときです。そのときに、手を取りまして、それで前へ、前へとこう引っ張る。これは不正解です。そうするとびっくりします。皆さんも目をつぶっていて、いきなり誰かにどっかに引っ張って行かれるとしたら、誘拐されるんじゃないかとか、変なおじさんかなと、こんな感じですよ。ですから、それは健常者の我々でもちょっと想像をすれば分かるんですけども、そういうようなことです。ですから、本当はですね、近くに寄って声をかける。どうされましたか、どちらに行かれるんですか、まずそれで安心してもらう。それでコミュニケーションを取る。その上で、相手がびっくりしないようなエスコートをするということですね。例えば、この肘のちょっと上あたりに軽く手を添えて、じゃ、前へ進みますと声をかけながら前へ進む。2歩前に段差があります。そういうことを伝えます。お伝えをしながら、無理に引っ張るのではなくて、相手の自主性、歩くペースでも考えながら、手を沿うようなかたちでエスコートをするというのは本来のあり方です。ただ、こういうことは以外に分かんないですよ。

私も車いすで生活をしていまして、一番困ったのは、実は骨を折ったんですよ。足の骨を折りましてね、選挙運動という運動があるんです。その最中に運動をし過ぎて足骨が折れました。疲労骨折というふうにお医者さんに診断されまして、もともとちょっと、いろいろ無理がたたったんだと思うんですけどね。それで足の骨を折ったときに、車いすですばらく生活をしていました。今でもヤフーとかで検索をすると、平井伸治、車いす、でポンと記事が出てきたりするんですね、あれなんか検索の学習機能があるみたいで、なかなか消えません。そのような生活をしてたときに、議場、県議会の議場なんかはフワフワな絨毯なんですよ。ああいうところって車いすはうまく走らないですね。しかもそこに坂なんかがありますと難しいです。また、ここは違うかもしれませんが、乗り越えるところに、よく金具でこう仕切りがしてあったりしますね。金具がありますと、これ車いすが滑ってうまく前に進まないですね。そんなようなことというのはやっぱりやってみないと、経験してみないと分からないわけですよ。そうしたちょっとしたことを学びながら、サポーターになっていただく。それでハートのマークがありますけど、あいサポート、あいサポーターとして登録をしようという運動です。今では隣の島根県、さらには広島県、長野県、奈良県というふうに広がってまいりました。厚労省の審議会なんかでも取り上げら

れる鳥取発の運動となっております。

そういう中で手話について、鳥取県は9月議会で手話言語条例というのを作りました。英語でもサインランゲージというわけでありまして、これは立派な言語なんです。日本には2つの言語が実はあるわけですよ。日本語とそれから日本手話という2つの言語です。構造が違うわけですよ。手話って言うのは、ひとつひとつこうやって喋っている音声言語のように一文字、一文字をなぞるようには喋りません。例えば、お会いしたいというんだったら、こうやるわけですね。それは会うという手話、それから、これはネクタイを示すんですけども、ネクタイが転じて、したいという手話、それで、会いたいってやるんです。この2つの言葉だけで会いたいとか、会いましょうとか、お会いしてみたいんですがとか、今度どこかで会いますかとか、そんなようなこと全部同じです。この2つだけで、あとは表情とか、口の動きだとか、その辺を組み合わせてながらですね、相手にコミュニケーションを伝えていく、それが日本手話っていうものであります。だからサインランゲージというのは本来違うんですよ。ところが1933年に鳩山一郎文部大臣が手話の教育というのを事実上禁止したんです。それで、口話法、当時はそっちの方が健常者とのコミュニケーションができるということがいいじゃないかという話だったんですね。ところが、それが禁止されてしまいますと、ろう者の方々のやっぱり教育水準っていうのはちょっと落ちたんです。それは十分にやっぱり伝わらないわけですよ、学習に支障が出てしまった。そういうわけで、それから60年経って1993年に我が国でようやく手話の教育というのが公に認められるようになりました。言わば戦いの歴史、虐げられた歴史があったわけですよ。これ日本だけじゃないです。だから、国連も権利条約の中でそれを謳ったり、またフィンランドの憲法に書かれたり、ニュージーランドだとか、ハンガリーだとか、そういうところで手話言語法っていう法律ができてきたり、そうやって今、世界中が特に21世紀に入りまして大きく今、動き始めている。その意味では鳥取県はちょっと先を行ってしまっていて、将来ビジョンを平成20年に作ったときに、手話は言語文化であるということをはっきりと書きました。これ全国で唯一だったんですね、その辺がありまして全日本ろうあ連盟という団体の方から鳥取でまず手話言語条例を作ってくれないだろうか、その動きを日本全体に伝えてもらいたいということがありました。

果せるかな、10月8日にいろんな議論がありましたけれども、手話言語条例が成立をしました。議場が多くの方々に埋め尽くされました。傍聴席がいっぱいになったんですね、それは全部、全部、ほとんど全部ですね、ろう者の方々です。ろう者の方々がやって来られまして、兵庫県だとか、遠くから、東京からも来られたかたがいらっしゃいますし、県内もいらっしゃいましたし、そういう方々が喜び合ったんですね、これは皆さんがその手話言語条例ができたなら、これをお祝いしようと言って、何かタオルを作っておられたんですね。それをあっちこっちに、今配っておられるような状態であります。鳥取県が今、非常に注目をされているわけでありまして。手話言語条例の内容としては手話が言語であるということを確認しまして、その促進策をいろいろと書くということです。手話を使いやすい環境を整備する、また事業者とか、県民の皆さんだとか、皆でこういうものを使える環境作りましょうということです。例えば、手話サークルの活動、これも今、それを促進する補助金を、もう今日、明日ぐらいだと思いますけど、第1号がまた始まることとなります。また、いろんなかたちでやろうと、例えば、今日鳥取県では手話チャンネルとい

う、そういう動画チャンネルを用意することにさせていただきました。そういういろんなことをやろうとしたら日本財団というモーターボートレースを主催しておられる団体から、全面的に協力が得られまして県の事業費の8割は日本財団がお金を出しましょうというぐらいのことになってきました。

耳が聞こえないっていうことは、人を切り離すっていうふうにヘレン・ケラーが言っているんですね。なかなか外見では分かりにくいものですから、その辺について温かく支えるサポートがあればいい。簡単な挨拶ぐらいやればいいわけですね、簡単なんです。これが挨拶、それに時間を組み合わせるわけです。例えば、朝は起きますんで、これでおはようになります。それで、昼は、これ12時の印ですけど、昼のこんにちはは、はこれにこれを組み合わせて、こうしたらこんにちはは、です。あるいはおやみなさいとか、こんばんはとかね、いろいろあります。夜になりますと、こうやって日が閉じるということと挨拶を合わせる、別にそれを区分けしなくても、これだけでも多分ろう者のかたは分かっていたと思います。

そういうようなことだとか、あるいはありがとうっていうふうなこともあります。ありがとうはお相撲さんが手を切る仕草、これでありがとうになります。よく似た手話でご苦労さんなんかは手を、肩を叩くような感じでこうやって挙げるとご苦労さん、これを組み合わせてやると何か凄く温かみのあるありがとうになる。こういうようなことをちょっとでもいいから覚えればそれだけでコミュニケーションのきっかけができます。筆談でもいいわけですね、字でも伝わるわけですから、全部が全部手話でコミュニケーションできなくてもいいわけでありまして、マナーとして、エチケットとして地域社会でそういうことができるところが仮に鳥取県にできたら、それって素晴らしいことじゃないかなと思います。

これがさっき申し上げたようなことで虐げられた歴史の中から生まれてきました。この度2,000万円の予算でやりまして、今、教材を作ったり、環境整備をしたり、教育の世界にどんどんとうこう広げようとしています。右下にありますけども、これはおもしろいあれでありまして、今のタブレット端末、iPadを使ってですね、飛ばすわけです。それで、向こう側にふくろうさんという手話の団体がいらっしやいまして、そこで手話通訳を提供すると、それで、音声と映像は今、電波で飛ぶ時代になりました、インターネットで飛ぶ時代になりましたので、これをろう者のかたに持って歩いていただいて随所で使っていただくと、こんなようなことも今、事業化をしております。もうこれのろう者のかたに募集を近々に始めることにしています。手話を学べる機会を増やす、また使いやすい環境を作る、また手話を学び、学習するための取組み。先般も初めてだと思うんですけども、ろう学校の中学生が弁論大会で優秀賞を取りました。非常に皆さん、元気が今出てきています。その辺、ぜひ、大学の皆さんもご協力をいただければありがたいなと思います。働きやすい環境だとか、あいサポート運動のサポート企業になってもらう、県や市町村、もちろん担当者レベルで、窓口で簡単な手話ぐらいやりましょうと、これよろしく願いしますっていうことですね、これは良いっていうことです。鼻を折るっていうのは、これは悪いっていうことでありまして、これは良い、それで、これにお願いしますを組み合わせますとよろしく願いしますというような手話になるわけですね。非常に何かでこう、何て言いますか、連想して作っていくようなものでございまして、もちろん文字もあります。例えば、あ、い、う、

えというような、こういうですね、文字もございますし、アルファベットもあります。これはAですし、さっきのいは、これはIというアルファベットと一緒になんです。これは万国共通です。

ただ、国によって違いますし、方言もあるんですね、例えば鳥取というのはこういうふうにするのが正式な手話だと思います。ただ、地元の人ばかりとこれだけで鳥取とやりますね。これでも多分通じています。他の地方の人にも通じております。これは鳥の嘴ですよ。これが鳥で取る、これが鳥取ということですね。そういうようなことであります。そんなに難しいことではないです。そうしたことをちょっとでも覚えておくと、ろう者のかた、ものすごく喜ばれます。特に私なんかこういう立場だからかもしれないませんが、時々そのあいさつの中に混ぜますとね、喜んでもらえるわけです。そうすると皆さんこうやります。これは分かりますかね。これは拍手です。拍手喝采しているというかですね、音が聞こえないものですから、音の代わりに手を振って、これで拍手。そうやって喜びを表現したり、同感を表現したりするわけです。そういうちょっとしたことが分かると、それだけでもものすごい打ち解けることができる。今まで阻害されてるわけですよ。静寂の中に閉じ込められた人たちが、いろんな仲間ができる。そういう思いを持っていただけるだけでも値打ちがあるんじゃないかなと思います。

障がい者スポーツの振興、車椅子マラソンとかいろいろあります。これもパラリンピックができることで強化をしていこうとしておりますし、障がい者就労、これも、実は今、鳥取県が法定雇用率を超えたところだったんです、民間企業も。これは今までにないことだったんですが、できた途端に国がちょっと基準を上げまして、またこれから追っかけることになってますが、県庁は高いレベルでこの法定雇用率を達成しています。これがすごいんですよ。私ここ平成19年に就任したんですけども、鳥取県の障がい者の就労工賃が今どんどん毎年上がるようになりました。そのためには、例えばスイーツ甲子園という大会ですけども、障がい者のかたがお菓子を作る、そのお菓子も皆さんが買ってけれなきや意味がないわけですよ、そういうふうにしようと。例えばパッケージ、あるいは本当においしいもの、だから別に障がい者であれ、健常者であれ、これはおいしい、買って食べるといものを本場で作ればいいわけです。元々残念ながら障がい者のかたは、今まで作業所の中で仕事をするという世界だったものですから、そんなに人件費が高いわけじゃないんで、逆に言えば競争力は強いんですよ、障がい者のかたの事業所というのは。それで、そのように逆転の発想をして、どんどんとそれを活発化していこうと。新商品開発だとか、そういうパッケージづくりだとか、販路開拓だとかの応援をしましょうということの本気でやりましたら、今これは全国ですが、全国の工賃なかなか伸びないんですが、鳥取県はこういうように今うなぎ上りに伸び始めているということになりました。

鳥取からそうした元気を出そうと、障がい者芸術文化祭を来年やろうということになりました。先般も秋篠宮殿下と秋篠宮妃殿下、鹿野の方に来ていただきまして、鹿野に鳥の劇場ってありますね、行ったことがありますかね、鳥の劇場。素晴らしい演劇の劇場があり、中島さんという演出家、これは文部科学省の芸術選奨の新人賞を獲られたかたですけども、そのかたが主宰をして、皆さん移住をしてあそこで劇をやっている、国際的な劇団を呼びまして、フランスだとか、韓国だとか、鳥の演劇祭というのをやったりしていますけどね、鳥の劇場という劇場があります。先般イタリアに行きました。トリノという町に行きまして、トリノの市長さんと表敬訪問で面談を

したんです。それで、鳥取とトリノってあまり関係がないんですけど、鳥取でもトリノ劇場がありますと言ったら大変驚かれました、こっちはバードの劇場なんですけど。全く同じ文字を書きます。トリノと書いて向こうも鳥の劇場があると思います。その鳥の劇場にお越しになったときに、障がい者のかたが演劇をすると、それで障がい者のかたのその演劇の練習をしている風景を見ていただきまして、秋篠宮殿下、妃殿下がお声掛けをして歩かれました。皆さんも、もう体を爆発させんばかりに喜んでおられましたね。来年が本番ですけども、一生懸命練習しようということになりました。驚きましたのは秋篠宮殿下、妃殿下を鹿野に案内した途中で、ある町中の施設に行きましたら、そこに置物があったんです。茶色いオブジェがありますしてね、何ていうか、アニメに出てきそうな感じなんですけども、例えばもののけ姫で山に行くところなのがありましたよね、真っ白い、あれに似ているような感じがするんですけど、カチカチカチってこう音がします。分かりますか、分かった人がいましたけど、アニメでね、そういうあれになんか似ているんですけども、かわいらしいオブジェがありまして、それをご紹介申し上げて、これ、実は障がい者が作ったんですよというふうにご紹介したんです。

実際その鹿野かちみ園という障がい者の施設がありまして、そこの入所者の馬野さんという人が作ったんですけども、そしたらびっくりしたのは、殿下と妃殿下がお話しをされまして、これ我が家の玄関に置いてありますと言うんですね。え~っと思って、いやびっくりしました。実は考えてみたら6、7年、もっと10年ぐらい前ですかね、に両殿下がやっぱり鳥取に来られたことがありまして、そのときに鹿野かちみ園にお立ち寄りになられたんです。そのときにどうもお持ち帰りになったんじゃないかと思うんですね。それを大切に玄関の置物に使っていただいているというのでびっくりしました。それぐらい実はその芸術についてはセンスというのがあり得るわけでありまして。これは今年もやりましたけど、プレの大会をやりましたが、あいサポートによる大発表等をさせていただき、来年の7月12日~11月3日に全国大会をやるということでありまして。アール・ブリュット、これは障がい者の展覧会でありますけども、考えてみればゴッホにしてもそうでありまして、ベートーベンもそうなんですけども、例えば耳が聞こえないとか、いろんな実は障がいがあるんですよ。そういう方がむしろ感性が研ぎ澄まされていい作品ができるというのはあるんです。それを再発見しようということで、最近高まっているのが、生の木のままの、生のままのアート、アール・ブリュットでありますけども、その見直しが始まっている、そんな展覧会もやろうと。

これがさっき申し上げた、これをもっと可愛らしくしたオブジェが、鹿野かちみ園のかたが作ったんですが、こういうアール・ブリュットですね。また、これがさっき申し上げたイタリアじゃないです、鳥取の鳥の劇場でありますけども、この鳥の劇場ですね、ここでも皆さんが主催をされまして障がいのあるかたの演目を用意しようということで、今、ワークショップをやっている。

また経済の方ですね、経済につきましては我々がもっともっと挑戦をしていかなければならない。確かに、その景気は緩やかに回復しつつあるというふうに言われますけども、なかなか地域の実感というのは湧いてきません。正直申し上げて、好調な企業さんもありますがそうじゃない企業さんがある。これは、都会以上に鳥取県の場合は、その辺の恩恵が回ってきにくいというふ

うに思います。だから、我々としても仕掛けていかなければなりませんし、このあと経済環境に大きく影響を与えるかもしれないのは消費税の増税という問題がある。それで、この消費税が増えるときに、当然ながら国としても対策を打つと言っています。例えば、低所得者対策1万円支給とかね、あるいは住宅取得者に30万円出しましょうとか。これは、所得制限があるんですけども、そういうような様々なことをやる。これは、打ち消すぐらいの話でありまして、消費が冷え込むのは明らかでありますから、消費が冷え込んだものをカバーするようなことを片方で考えないと、なかなかこれ減速のブレーキをかけることになりかねない。その施策パッケージは、これから年末の予算編成に向けて注目をされる場所だと思います。鳥取県としても、そこの支えをしていかなければならない。経済成長戦略を改定をしまして、経済再生成長戦略というのを県としても作りました。例えば環境エネルギー関係とか、次世代のデバイス関係だとか、いろんなこれからの事業を考えよう。

たとえば、医療関係、これも鳥大さんと随分連携をさせていただいて今チャレンジを考えようということをしていっているわけです。これは、北野先生、鳥取大学病院の、附属病院の北野先生が大変熱心なんです、医療機器メーカー等との連携をしようとかということを考える、この辺のバックアップを県全体でも、経済界と一緒にやっていかなければいけない。これは、知の拠点である大学のご協力も今後必要になろうかと思えます。実は、モリタという、歯医者さんの椅子がありますよね、行くと何かこう寝かされて、それで、アーンとやってこうやって、歯を削り取ったり、それからうがいをする場所がついたり、あの椅子を作った初めてのメーカーがモリタというところなんです。それまで日本の歯医者さんというのは、こう普通に椅子に座りましてそこにいろいろとちょっと無理をしながら治療をしていたわけです。アメリカから新しいそういう医療スタイル、歯科医療のスタイルが伝わりまして、それを日本で初めて本格化させて販売したのがモリタさんというところでありまして、これは圧倒的なシェアを今でも持っています。この企業さんを倉吉の方に誘致をしました。実はこれ、医療機器メーカーの本格的なやつというのは、鳥取県初めてなんです。ですから、いろんなことをやらなければいけない、もちろん支援策としてファイナンスの面もやります。それから医療機器メーカーですから、それが使えなきゃいけないんですけども、使おうと思うと医療関係の法規制とか、規制行政があるわけです。ですから、それを許可してもらって、使うことを、売ることを許可してもらってサポートが必要なんです。

これは、鳥取県ではまだやったことがない。だから、それをじゃ、チームを組んで、プロジェクトチームでスムーズに新商品を開発して売れるようにやっていこうということをしているわけです。あるいはデータセンターの立地促進だとかもあります。キノコも鳥大に遺伝資源の研究センターがございまして、いろんなものが入る。最近、実は、鳥取のキノコは評判がいいんです。3年ほど連続して実質上、全国1位になっているんです。全農という農業団体の全国組織がありますが、そこで2年連続して団体優勝、鳥取県が優勝したんです。生産額は、決して多くないんですけども質がいい。さらに翌年についても、我々の方でやっぱり今年も獲りました。ただ、2回続けて、3回続けて優勝というのはできないルールになっていますので、優勝とは書いてありませんが点数的には1番だという、そんなように全国レベルの今水準まで急速に鳥取県のシイタケ栽培が引き上げられてきているわけです。ただ、菌類というのはいろんな使い方があ

りますから、例えば漢方薬の原料ですね、そういうこと、ここにも書いてありますけども、チョレイマイタケとかですね、そういうようなことがあるんですけども、実は、中国は今これの輸出を禁止したんです。ですから、漢方薬の原料が日本に入らなくなっている。それを高い値段をかけてどこかから買いつけてくるんじゃないかと国内で生産をする、そういうことを鳥取県内で目指せたら、今まで細々と林業家が、こういうキノコの栽培をしていたものがすごく収益性のあるビジネスになるかもしれない。そんなようなことを本気で目指そうじゃないかということです。

今でもすでにやっているのは、これ、レンチナンという成分ですね。これは、抗がんの効果があるというふうに言われていまして、大手のメーカーさんに鳥取県のシイタケ、県の方から卸しています。先般も、その社長さんにお会いしましたが、非常にこの辺は期待をされています。もっともこの辺を研究開発していったらおもしろいんじゃないかなと、こんなようなことを始めました。また海の、海に近いところで井戸を掘りますと、その掘った井戸から海水が出てくると。井戸水は、皆さんご案内のように1年中同じような温度ですよ。そういう意味で成育条件を固定化するにはいいわけです。この水を養殖用として使います。特に海水の井戸というものを実用化してしまえば、それで、かなりコントロールされたものを作ることができる。今、一番期待しているのは鯖ですね。実は、鯖というのは結構病気があります。ですから、養殖をすると、海の中にいるそういう病気の発生源に触れ合わない。そうすると固定化された、隔絶された空間で海水を使った井戸で養殖をしますと、これは、そういう言わばリスクフリーな鯖になる。さらに年間を通じて温度が一定化されていますから、その温度帯が、どうも鯖の成育条件として最高の成育条件なんです。だから、よそで養殖をするよりもずっと早く養殖ができる。そういう意味でこれを今、開発をしたもんですから、これを研究の実施をして使えるようにできないだろうか。実際今、鳥取県でもギンザケの養殖とかを始めたりしまして成功しておりますし、いろいろと単に捕るだけでない、漁業というのに今動き始めています。

技術人材バンク、これを作って産業立地の応援をしようとかですね、それから若者や女性のチャレンジできるような就業機会の確保、これも大学さんにもご協力をいただきながらということですが、始め、本格化を今、させていただいているところですね。中小企業対策、何せ中小企業が多い土地柄であります。そういう意味で県内企業さんと外部との商談会、これをここ6年ぐらい、私の就任後、精力的にそれまでの県政をひっくり返しまして産業振興を始めました。トヨタさんとか、あるいはスズキさんとか、アイシン精機さんとか、ダイハツさんだとか、大和ハウスとかですね、そうした名立たるところとマッチングをします。そうすると、今まで買ってくれなかった顧客がこう増えてくる。また、そういうところで話し合いをすることによりまして、こちらの方の商品開発にも結びついてくる。鳥取県版の経営革新計画、これも始めましたら、今、爆発的にこれも増えてきております。やっぱりその中小企業も今までの企業系列から変わらなきゃいけないんですね。今まで、特に東部はそうなんですが、三洋というビッグネームがありました。それとの関係だけをやっていれば言わばその就業が成り立ったわけでありましてけども、事業が成り立ったわけでありまして、そうでなくなっておりますので、それを何とかひっくり返していかなきゃいけない。その意味では、新しい産業を創造する意味で経営を革新していく必要があるということですね。それを県で例えばトライアル発注と言っていますが、買う、あるいは

新分野の転換の助成を行う、こうしたことを始めております。

また、先程申しましたように大交流時代を起こそうと。道路がつながってくる、航空便の問題だとかですね、その辺を改善していくことで観光事業を呼び起こす。あるいは産業立地を誘発する、そうしたことに結びつけていこうということです。この度、12月の20日からスカイマークエアライン、スカイマークが米子鬼太郎空港に就航することになりました。米子から成田、米子からこちらの神戸空港、神戸を経由して茨城空港に行く便もあります。今、セール中でございまして、最初の2ヶ月間9,800円で成田まで飛べると、成田から今1,000円ぐらいで都心に行くバスがあるんですね。そういうようなことで行きますと、かなり安く行く足になりまして、バスに乗るように使って、飛行機を使う時代を目指したいというふうにスカイマークは言っていました。それから鳥取空港の増便を今、ANAと一緒に国交省に今呼びかけていまして今審査中でありますけども、これが通れば1便増便になるかもしれない。また、チャーターフライトとかですね、いろいろとその空の便の充実を図ろう。高速道路につきましてもいろいろつなげてまいります、鉄道、これの高速化も考えるべきではないだろうか。これは、高速道路であります、この12月の14日にここが開通します。ここから近いところにね、大学から近いところに鳥取西インターチェンジというのが出来まして、ここから鳥取インターチェンジにつながります。大学から行きますと、国体道路を行っていただければちょっと行きますとこの鳥取西インターに入りまして、これで、全国の高速道路網につながるとい時代がやってくるわけでございます。また、21日には、この区間8.6kmが開通をします。これで、この西の方からはずっとつながって、この大栄のところまで全部高速道路で行けるように、初めてなるわけですね。この東西の軸で言えば、こちらの駒馳山バイパスというところもこれも3月いっぱい開通するという目処になりました。今、実は、これが元々通ってなかった鳥取道が全通しましたしね、今、急速にアクセスが変わってきています。これが工場立地なども、最近、急速に呼び込んでいる。鳥取県、非常に頑張れるようになったというのはその辺に要因があります。

また、観光もそうです。こちらに松江自動車道も出来まして、松江道もそうですし、鳥取道も無料の高速道路なんですね。これで広島方面からのお客さんが来るとか、こちらの方からも来るとか。先般は、砂丘だとかでちょっと撮影会をやったときに、若い人たち、観光客の方々と一緒にパフォーマンスをしたんですが、名古屋から車で来ましたとか、山口から車で来ましたとか、もうデートコースですね、鳥取や砂丘にやってくると。すごいやはり車の力というのは違うなというふうに思います。これを上手くすると交流人口が増えまして、居住人口が少なくても産業の活性化につながっていくことになるわけですね。また、北東アジア、この地図を見てお分かりいただけますように、東京というのはアジアにもすごく遠いんです。太平洋側を表日本だと威張っていますが、こちらは表じゃありません、歴史的にはこっちが表です。こっちがアジアに向かったの玄関口なんですね、ところが皆思い込みでそういうふうに考えてる。いろんな思い込みがあるんですね、例えば、東京の人は鳥取というのは何ちゅう寒いところかなと思う。しかし、緯度を見ますと、緯度はこういうふうに通っています。東京と鳥取とは全く同じ緯度なんですよ、これ以外に知られていないんです。我々錯覚を起こしているんですね、学校で習うときに地図を実は少し緯度を傾けてあるんですね。何か鳥取が北にあるイメージで見られるんですけども、そ

れは、実は日本列島はずっと弓なりに、北から南に伸びているのでありまして、だいたい同じようなところにあるわけです。そういう錯覚の1つにこっちが表側という錯覚、東京が世界に近いという錯覚がある。世界に近いのはむしろ山陰なんですね、表側はむしろ山陰なんです。大陸に手のひらを伸ばしたようにある。これを活かして今ではこう東海という街を経てウラジオストクに行く、そういう航路が開かれて3年近く、3年以上経っています。

ですから、最近では、鳥取に行きますと唯一の航路が通っているのは鳥取なもんですから、ウラジオストクの人でアンケートを取ると、日本の都市で知っているのは東京の次が鳥取になっているんですね、それぐらい非常に結びつきが出てきている。また、先般は香港から夏休み中1日置きに飛行機が飛んできました。それで観光して帰るわけですね、妖怪列車に乗ってこれが大フィーバー、中国ではキョンシーのイメージですかね、それで妖怪を見に来るのか分かりませんが、どうもゲゲゲの女房が見られたこともあって、ゲゲゲの鬼太郎が有名になってきたようであります。先般はタイの方に行きました。コナンがやはりすごい認知度が高いですね。ですから、例えばそういうことをやると今度また新しく東南アジアにも我々のターゲットがいるのかもしれない。境港はそういう意味で整備をしようということで動きがありまして、今、竹内南岸壁のところに国際フェリーターミナルを造ろうとしています。これがもし国際フェリーターミナルが出来ますとおそらく世界でも珍しいと思うんですが、ここに豪華クルーズ客船でこうやって着くわけです。そうすると夢みなとタワーがあって、ここから景色もいいですし、もちろんクルーズ客船はものすごい背が高いもんですから、そこからこの日本海、大山なんかも一望できるわけです。降りますとここに温泉があるんですね、これみなと温泉館という、露天風呂もあるんです。そういうのがある港って、たぶん世界中探してもないんじゃないかと思うんですね。

また、こちらの方にきますとヨットハーバーもあります。またちょっとした買い物ができるとか、遊べるゾーンも作りながらここを拠点化しようということですね。今、ロシアの人が鳥取県にこうクルーズ船、DBSクルーズで入って来ますと、最初のころびっくりしたのは、このPLANTという雑貨屋さんがあるんです、大型雑貨屋さん。ここで何買うのかなと思って見えますと畳を買って帰るといふ、船なんでね、畳買って持って帰れるわけですね、そういうようないろんな使い方、港としての面白さっていうのは出てくるんじゃないかなと思います。今、実は海外等も含めまして木材の取引だとかでいきますと、全国屈指の港になって、境港も今急に元気になってきています。特にクルーズ客船ですね、これは我々実はそのちょっとチャレンジングに行ったんです。シンガポールで設立されたんですが、アジア・クルーズ・ターミナル協会というのができました。ACTAという団体であります。これに私たちチャーターメンバー最初のメンバーで加盟したんです。そしたらそれがご縁でクルーズ屋さんですね、世界のクルーズシンジケートとつながり始めまして、今年で言うと20回近く、来年はもう30回の寄港が見込まれるんじゃないかというぐらい、今増えてきております。その中で特に大型クルーズ船でいきますとこうようになりますね、うなぎ登りであります。サン・プリセスとか、コスタ・ヴィクトリアだとかこうした2,000人だとか、さらには来年はマリナ・オブ・ザ・シーズというような3,000人規模のそういう客船も今入港が予定をされているというぐらいになってきました。ですから、そういう方々が境港を拠点にしまして、鳥取を拠点にして、近隣へ行かれる。我々としてもおもて

なしをしようというふうに動いてまいりました。また、今まで日本海側には物流の定期船がなかったです。ですからいま国際RORO船、国内のRORO船と言われますこういう横付けできる船、車を乗せられることができる船の就航を今打診をしています。

実験をしました。実験しましたら今年度3回実験したんですが、いずれも好調に荷が集まりました。それも結局松江道が通ったり、鳥取道が通ったりしてますので、アクセスが良くなってこういうかなり広範囲の集荷が見込まれるということですね。今までは、例えばこう下の山陽側もそうなんです、グルッと回ってこういかなければいけない。それがこういう近回りができるようになるということでアクセスが良くなるわけですね。この辺を今目指して、日本海側を活性化したいということでもあります。そういう同じ思いを持った地域が集まりまして、先般ロシアのウラジオストク、これはエイペックの行われた会場と全く同じ会場ですが、そこで地方政府の首脳会議をやらせていただきました。これはロシアの沿海地方のミクルシェフスキー知事であります。このかたは、前は極東連邦大学の総長をしていた人ですね、その人が今知事になっています。わりとロシアって学長さんとかそういう知識層とそういう行政のトップとの入れ替わりが結構あります。今、沿海地方の議長をしているのはゴルチャコフさんというかたであります、これは今、吸収合併して統合されましたけども、その前進であるウラジオストクの極東大学の学長をしていた人が議長をして、知事も議長も学長の出身者でございまして、いずれ豊島^{てしま}学長が知事になる日も近いということかもしれません。冗談ですから本気にしないでください。

そういうことで、ロシアですね、失礼しました。1つ飛ばしました。これが鳥大病院とそれから極東連邦大学の医療センターの調印式、これから医療協力をしようということもこの中でさせていただきました。私とミクルシェフスキー知事も立ち合わせていただきました。ビジネスサポートセンター、これも作りまして活発に荷を動かそうとしています。結局、極東制して、いずれはモスクワに行きたいわけですね。南周りで、太平洋を周って、インド洋を周って、スエズ運河を越えていくと40日ぐらいかかります。その船がこのシベリア鉄道経由で行きますと2週間ぐらいだいたい半分、それ以下ぐらいで回れるリードタイムになるわけですよ。そうすると、これはけっこう競争力が上がるかもしれない。ただ、今なかなか鉄道ルートなんかがむずかしくて使われていないということがあります。いずれはそういうふうにもヨーロッパ向けにも展開しようよ、可能性があるということですね。そういう意味でビジネスサポートセンターでも活動をさせていただいております。さっき申しましたように、北東アジアゲートウェイと私の方では言ってましたが、最近はやっぱ東南アジア、総理もこの間、昨日までラオスやカンボジアへ行っていました、これでアセアン全部終わったということですね。こういうアセアン地域にも我々としても拠点を作る必要がある、現在でも、例えば菊水フォーミングさんとか、明治製作所さんとか、県内の勢いのある企業はタイにもう進出済みなんです。そういうようなことでありますし、また向こうは結構所得層の高い人たちもいまして、鳥取の産品も売れるだろうということで、シンガポールでやったようなものを、今バンコクでやりました。王秋という1玉このぐらいの大きさ、ちょうどラグビーボールぐらいの大きさの梨ですけども、これをだいたい日本円で2,000円ぐらいで売ってましたですね、いろんなビジネスチャンスこれから見つけていきたい、観光も含めてであります。

旅行業協会の会長さんともこのたび面談をしましたら、来月1月に、失礼、来年の1月にですね、向こうから旅行会社20社ぐらいがこちらに視察に来ようというような話になってきました。そういう意味で東南アジアビューローを開こうとバンコクで開設をしたところでもあります。また、世界とのつながり、スポーツもあります。ワールドマスターズゲームズというのがありまして、これはオリンピックのアマチュア版であり、生涯スポーツ版であるのであります。IOCの委員なんか为中心になりまして作っているんですが、この視察団をお招きをしました。鳥取県を見ていただいて、非常に満足をして帰っていただきました。この関係で、私、夏にトリノに行ったんですね。これがカイ・ホルムさんという会長さんであり、事務局長さんでありますけども、これを2021年東京オリンピックの次の年に関西エリアに誘致することが決まりました。この鳥取もその会場の一部をお引き受けをするということになります。そのスポーツツーリズム、エコツーリズム大会をやりましたけども、自転車だとか、ノリディックウォークだとか、鳥取県らしいスポーツもだいぶ動き始めました。おもてなしの県づくり、観光関係でも、おもてなし、外国語標記だとか、砂丘もこれニューヨークタイムズに出たことがあるんですが、世界的には砂漠は緑化するもんだと皆さん思って、国連もそうやってるわけではありますが、鳥取に限っては皆で草を抜くという、緑化を排除するということになっているわけですね。そうやってむしろ大切な景観を守っているわけです。全国植樹祭、先程申しました両陛下お見えになってさせていただきましたが、大成功しましたし、これで士気が高まった。また、エコツーリズム国際大会、先程申しました養老孟司先生とか、そうした方々と一緒に卓を囲んでやったり、また、いろんなエクスカージョンのプログラム組まさせていただきました。課題もあります。それを克服していくことで全国でも目立って、自然と親しめる観光ができる、そんな地域を作ろうと、今、しているわけです。

ここにそういうメニューがあります。これは、底が透明なカヌーですね、これ浦富海岸でやっているわけでもあります。実は浦富海岸は宮古島と並んで日本で一番透明度が高い。これは、ですからこの底が透明なカヌーですとそのままが見えるわけですね、カヌーに乗りながら。なんとロマンチックなこととございます。実は、私も家内とこの夏これ行ってまいりました。あいにく、ここだけの話です、その直前に大雨が降りまして、沢山ゴミがきたんですね。だから、実は私は乗っているときは、あんまり底の方は見えなかったですけど、視界が悪くて。ただ、宣伝でやっているもんですから、それでいっぱい写真を取られてPRには一役買いました。今は読売旅行だとかいろんなところでグラビアに使われるぐらい、この浦富海岸の透明なカヌーが有名になってきています。山陰海岸ジオパーク、これは来年が契約更改の年でありまして、これを通り越えなければなりません。ただ、再来年にはアジアの大会をやることに、アジア太平洋ジオパークネットワーク国際会議ってのをやることになっています。こういうような特徴ある自然を活かした発電、エネルギー政策もある。いよいよソフトバンクの鳥取米子ソーラーパークが完成をしまして42.9MW、これは鹿児島について全国2位の発電規模となります。いよいよ2月に通電をするということになります。また、その中にはガイダンス施設ができて環境教育の拠点にしようということです。また、豊富な木材資源を活かしまして、これを燃やして発電をする木質バイオマス、今、政府の方で日新林業という会社を中心となってやることになっています。また、東部の方も今最終的な仕込みをしています。

温泉熱、これも東郷温泉で、バイナリーサイクル発電と言いますが、これは特殊な媒体を利用するわけですね、要は気化する温度が低いものを使えばタービンを回すことができるようになる。そういうような原理を利用しまして温泉熱の発電だとかいろんなことをやる。温泉熱の利用としては、今もうすでに始まったのは、スッポンを作るんです。また、楽しみにしてもらいたいのと思いますが、来年ぐらいになりますとスッポン料理が湯梨浜町の名物になると思います。スッポンというのは、冬眠するんですね、あれ、亀みたいなもんですから。ですから、冬眠すると育ちません。温泉熱、温泉の中で育てると寝ません。従いまして、どんどん育つ。だから成長が早いんですね。だからすぐスッポンが作れるということでありまして、これを利用してスッポンの養殖を今やっているわけですね。水力発電、これも皆さん地図を思い浮かべていただければ、実は中国山地から山陰の海岸まで、迫っているわけですね、全国的にもこういうところはあまりないです。ですから、いろんなところに実は比較的急な水の流れってできるわけでありまして、それを利用して水力発電のメッカになり得る。ですから研究開発したのはマイクロ水力発電装置。これも日本マイクロシステムという米子の会社と一緒にしまして、今、実証化をしているところですね。またこうした自然と親しむ林業者の育成、これも今回の植樹祭のあと盛り上がりまして、若い人たちが結構入って来るんですよ。たぶんこの中におられるかたでも林業に入られるかたがいらっしゃるかもしれない。そのとき鳥取県は有利ですから、皆さんの初任給程度は保証しますんで。こんな県ありませんのでね、覚えといていただければというふうに思います。実際、最近では機械化されているんですよ。ですから女性が意外にこう林業者として入って来る。この大会でも宣誓したりいろんなかたがいらっしゃいますけども、こういう大きな機械を使いましてやるもんですから女性でもやる職場になりつつあるわけです。

11月の1日、9日と、10日とですね、東北3県を回りました。私も9日の日は参加をしましたが、東北は結局津波で森を奪われてしまいました。また、原発の問題なんかもあったりします。森をもう一度復活をさせよう、それに県内の小学校などで協力してもらって、東北から預かった種を苗木にします。それを持って行って植えようっていうサイクルを回し始めてます。とうほくとっとり森の里親プロジェクトというのをこの度、向こうに植えに行くということでやりました。向こうでも非常に報道されたところでありました。

話は変わりますが、オリンピック、パラリンピックが決まりまして、これで元気を出せるスポーツ大会、この近くにも来ますけども、鳥取マラソンっていうのを今度作り直しまして、ずっとこうやって砂丘から始まって観光地を回って、この国府町の万葉の里なんかも回りながら布勢にゴールするという、そういうマラソンを今年初めてやる、20日からエントリーを、開始をします。こういうような鳥取マラソン。それからこちらはリアカーを引いて世界1周されたかた、吉田さん、これ鳥取市のかたですね、それから加藤彰さん、このかたは自転車で世界中7大陸を制覇されたかたです。こういういろんなチャレンジが今嬉しいことに県民の間でも起こってきているところでもあります。そういう勢いを鳥取力創造運動、地域づくりへつなげたいということで始めました。まるたんぼうっていう森のようちえん、これは森の中で子どもを育てようっていう独特の取組みです。今これ評判になりまして、これに入れたいがために大阪から引っ越してくる家族とか、それから海外からの問い合わせであるとか、そうしたものが本当に入ってくるんですね。智

頭町この入るがために引っ越してくる人たちが今増えてきております。そういうわけで、これを応援して、鳥取市内にも1つできましたし、智頭は2園目ができましたし、伯耆町にもできましたし、こうやってどんどんこうした取組みを増やそうと、今、しているわけですね。こういう住民の皆さまのお力で自ら考えて計画を作り、実施をしてもらうというサイクルをトータルで応援しよう。これを我々がバックアップをするというやり方ですね、行政の方はファイナンス面でバックアップをする、人材の面でバックアップをする。そういう、アドボケイト・プランニングという手法を、鳥取県、全国で初めて導入をしました。その中にまるたんぼうだとか、それから智頭林業の、智頭の地域づくりだとか、そうしたものがエントリーされて今動き始めています。鳥取はボランティア活動が豊かなところでありまして、全国でもトップクラスです。こうしたものを利用して、先程申しましたように地域づくりができればいいんじゃないかな。これがさっき冒頭ご紹介申し上げました、船岡の人ですね、若い2人が入られたのは、この仕組みなんですけど、地域おこし協力隊っていう仕組み、これもどんどん今増やしていきまして、平成25年度末には26名の配置になるうとしております。こういうふうに若い人たちが入っていくと地域が変わる、それを応援しています。また、鳥取県は女性の就業率が全国でも指折り高いんですが、その女性の活躍を促進する活動もしておりまして、男女共同参画の点数でいきますと、鳥取県が東北大学の調べで全国ナンバーワンに輝きました。そういう女性の働ける環境作り、それも進めています。ワークライフバランス、これにつきましても、既に479社を男女共同参画の認定企業にしています。農業への就農、これ若い人たちも入ってくるようになりました。このかたが鳥大の卒業生でいらっしゃいまして、日野町で椎茸栽培をやっています。テレビでニュースをご覧になったかもしれませんけども、この間この日野でこの週末に結婚式しましてね、根雨の街道で、あの人です。嫁さんまで向こうでゲットしまして、日野町にしっかり住んでいますが、元は兵庫県の人であります。

こんなようなかたちで入ってくる人たちがどんどん出てきている、これは東日本大震災以後価値観が変わって、こういうようなライフスタイルを求める人たちが増えてきた。それからそこで生産される安全・安心な食材等を求める消費者が増えてきた。だからサイクルが今鳥取用に回り始めているんですね、これを活かさない手はないし、ぜひ多くの方々の参画をお願いしたいと思います。そういう意味で農地の流動化を図ろうと国に先駆けてやっています。今、国の方の予算の中でも今見え隠れし始めました。また、6次産業化と言っていますが、優秀な農産物を活かそう、例えばココガーデンってありますよね。そういうところで、卵、高い卵作っていますけども、それを活かしたお菓子のカフェを作って、大江ノ郷っていうところでやっていますけども、ああいうものなど、いろいろとチャンスがある、それを応援しようという仕組みを強化しています。

また、海外にも行こうと。さっき申しましたように鳥取、ロシアとか、香港でもスイカを売ったりしています。ロシアにスイカを持って行った最初の年、結構売れたんですね。1玉だいたい鳥取ですと2,000円ぐらいのものが7,000円、8,000円で売れるわけですね。すごいなと思ったんですけども、そしたら向こうの総領事さんが言っていました。実はロシアでは、鳥取県さんがスイカを売りに来る直前に、ちょっとした社会的問題がありましたと、だいたいスイカは中国か

ら仕入れるんだそうです。それで中国から仕入れたスイカから、あるものが見つかったと、その年は中国のスイカの作付けが悪かったみたいでして、あんまり色付きがよくなかったんですね、赤い実にならなかった、そこで合成着色料を使ってあったと。そのあとに鳥取県が来たんで本物の赤いスイカだと、そういうこともあったみたいでして、結構最初の年弾みがついていました。また、これは東尾理子さんと石田純一さんですけど、こういう方々にも応援していただいて、食のみやこ鳥取のブランド作りを売り込んでいるわけですね、中山間地ではジビエ料理、これは鳥大のかたも鹿を素材にした料理開発をされています。それをもっと大々的にやろうと、国道 29 号線なんかはニクロードと呼ぼうとか、そんなような運動を今始めたところでございます。

また、安全・安心を作る、東日本大震災が発生をしました。これで多くのことを我々は学んだわけです。鳥取からも助けに一番早く物資が宮城県に届いたのは、鳥取県の物資だったんです。なぜかと言うと、その発災の 3 月 11 日の夜から、宮城の村井知事と連絡を取り合っていました。それで必要なものはすぐ送るぞということで準備をしながら、電話がつながった途端にそういう手配をしたものですから、宮城県の河北新報っていう新聞の社説に出ましたけども、鳥取県の物資が一番早く着いた、こういうようになってます。我々は鳥取県西部地震を経験しています。だから、災害に対する備えには我々としても取組んできた実績があります。先般の場合、伊豆大島の土砂災害がありました。これも多くの人命が失われて未だに見つからないかたもいらっしやるわけです。安全・安心を作るためには、例えばこういう堰堤を造ったり、こういうハード面の整備が必要ですよ。ただ、それだけではいけないわけでありまして、ソフト面、土砂災害警戒情報、これを気象台と一緒に出すようにいたしました。これ注目してもらいたいんですけども、必ず県の防災のホームページ等で案内をしています。それで、危ないなという、例えば累積雨量だとか、土壌の状況などと組み合わせましてきめ細かな予報をするようにしております。

また、これもそうですね、土砂災害の危険情報、また防災教育、これも例えば地震の震源地、鳥取県西部地震の震源地だった日野町でも、小学校でそういう防災教育をかなりリアルにやったりしました。情報が大切ですから、ツイッターなんかを活用した情報発信もしていますし、この 2 月までには情報コモンズを防災面で作ろうと、だから我々の方で提供する、あるいは気象台が提供するいろんな防災情報がある、これを地域で共有をしまして、それを例えばテレビだとか、あるいはツイッターだとか、そういうところに即時に流れていく、そういう情報システムを今整備中でございます。原子力発電所の不安感、これも福島第一原発以後の問題になりました。鳥取県としては全国で初めて安全協定というものを結びました。安全協定を結び、さらに立地県並というような回答を中電から引き出しましたけれども、やっぱりやるべきことはいっぱいあります。先般は島根県の知事の了解を得まして、島根県が原発について判断するときは鳥取県の意見を聞くというルールができ上がりました。モニタリングの体制の整備ですね、これも県の中部にそのセンターを作ります。

スーパーボランティア、これは、ちょっと話は変わりますが、住民の皆さまの力を活用した、いろんなやり方ですね、また医療機能の分担、こちらについては東部の今、医療圏の再編をしようとしています、赤十字の病床数を減らす、中央病院の病床数を 500 床以上に増やす、これで先般、つい今週だったんですが、厚生労働省の内諾を得まして、いよいよこのプロジェクト

が動き出すということになります。それで、高度化した医療で助けられる命を助けられる体制にしようと、こちらは街中の医療をやろうと、このような機能分担をすることにしております。看護師の養成所として養成機関を作るとか、従事者の確保を鳥大とも一緒に始めております。高齢者の生き甲斐作り、特に安心して暮らせるようなそういう体制作りをしよう、これ鳥取ならできると思うんですね、コミュニティが小さいですから、どこにどういっておじいちゃん、おばあちゃんがいるってみんな知っています。だから、きめが細かいことができるんじゃないか。さらに、介護支援ボランティアという新しい仕組みを入れて、鳥取市なんかも始めています。県内の数市町村で始まっていますし、支え合いの活動、これ20億ぐらいの基金を作りまして、これで支え合いの仕組み作りを動かすようになっております。

また、子育て王国、これも鳥取県やっぱり子どもがすくすく育てる環境なんですね、自然がいい、そういう意味でいろんなことをやりました。例えば不妊治療だとか、あるいは医療費対策だとかやりましたが、合計特殊出生率がずっとここ数年で上がってきまして、今では全国第9位まで上がりました。さらにこうした知見を共有しようと若い知事で集まりまして、子育て同盟を作り、国に働きかけることも始めました。教育の改革もしようと、スクラム教育と言っていますが、小中学校や中高の壁をなくそうということを始めました。そうしたら、この度学力テストをやったんですね。そうするとこの一貫校はポイントがいいんですよ。ですから、こういうことをやってみる値打ちがあるなというふうに思っています。また、いじめの不登校対策、子どもたちのチャレンジ意欲の喚起、多子世帯対策、こういう子育て関係の整備等をやしまして、今条例を作っています。養老孟司さんが「人生でぶつかる問題にそもそも正解なんかない」というふうに言っています。皆さんもこれからいろんなチャレンジがあろうかと思えます。皆さまのそれぞれの人生、すばらしい人生になることを心からお祈り申し上げますとともに、ぜひ鳥取県のチャレンジにも皆さんの立場で参加をしていただきたいと思います。本当に今日はありがとうございました。

(司会) 平井知事ありがとうございました。休み時間になりましたので、質問は受けられませんけども、もう一度じゃあ拍手で終わりたいと思います。じゃあ、どうもありがとうございました。

(平井知事) どうも皆さんありがとうございました。

以上